正直古墳群調査保存事業

正 直 古 墳 群

―第１次発掘調査報告―

平成30年３月

福 島 県 郡 山 市 教 育 委 員 会

正直古墳群調査保存事業

正直古墳群

しょうじきこふんぐん

―第１次発掘調査報告―

平成30年３月

福島県郡山市教育委員会

序　　文

郡山市内には、1,182箇所の埋蔵文化財包蔵地が所在しております。このことは、古くからこの地に人々が暮らし、人やもの、情報などの交流が盛んであったことを物語っております。しかし、近年の活発な開発によって消滅の危機に瀕する遺跡もあり、大地に刻まれた歴史と言える埋蔵文化財を保護するために、試掘調査及び発掘調査を行い、遺跡の保護・保存を図っているところです。

正直古墳群は、同地区内に40数基の古墳が現存する市内でも重要な遺跡のひとつとして位置付けており、往時は50基以上の古墳が群を成していたと考えられておりますが、開畑や宅地造成などによって消失してしまった古墳もあり、貴重な古墳の保護・保存が急務となっている状況にあります。

本古墳群は、昭和24年から開畑時の発見や宅地開発に伴い、個別に古墳調査が行われ、概ね５世紀代を中心とする古墳群として評価を受けておりますが、古墳群全体に及んだ調査はこれまで行われませんでした。

このたび、国庫補助事業として、古墳群の保護・保存を目的に古墳及び古墳群の実態解明に向けた調査を実施するに至り、今年度は、古墳群の時期変遷の基幹として位置付けられ、保護・保存が急務となっている正直21号墳と、その近隣に所在する20号墳と43号墳を調査対象に、測量調査及び発掘調査を実施いたしました。

本書は、今年度の調査成果を第１次発掘調査報告としてまとめたものでありますが、皆様に広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助となりますことを願うところです。

結びに、調査にあたり多大なる御協力を賜りました地権者の皆様、田村町正直行政区長様、地元の皆様、発掘調査に従事されました皆様方に厚く御礼を申し上げ、序文といたします。

平成30年３月

福島県郡山市教育委員会
教育長　小　野　義　明

調 査 要 項

遺 跡 名	正直古墳群（しょうじきこふんぐん）
所 在 地	福島県郡山市田村町正直字除古・竹ノ内ほか
調 査 期 間	平成29年９月１日～平成29年11月30日
調査主体者	福島県郡山市教育委員会（教育長　小 野 義 明）
調査担当者	公益財団法人郡山市文化・学び振興公社（代表理事　藤 川 英 敏）
調 査 保 存 懇談会委員	菊 池 芳 朗（国立大学法人福島大学行政政策学類教授） 藤 沢　敦（東北大学総合学術博物館館長） 柳 沼 賢 治（国立大学法人福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授） 玉 川 一 郎（福島県考古学会会長）
指 導 機 関	文化庁（川 畑　純）　福島県教育庁文化財課（小 野 忠 大）
調 査 員	高 田　勝
調査補助員	吉田イチ子
協　　力	遠 藤 貞 一　舞 木 義 寛　平 栗 慶 一 平晋建設株式会社（代表取締役社長　高 橋 健 二）

例　　言

1．本書は、福島県郡山市田村町正直字除古・竹ノ内ほかに所在する正直古墳群の調査保存事業に係る第１次発掘調査報告書である。

2．正直古墳群は、正直Ｂ遺跡の範囲内に点在するため『福島県遺跡地図』（1996　福島県教育委員会）には同遺跡名で登録されている。しかし、昭和39年に刊行された『福島県史』第６巻資料編１に「正直古墳群」として登場し、昭和47年に刊行された『郡山市史』第８巻資料編（上）においても同名称が継承されている。また、関係者の間では現在もこの名称が広く使われており、今回この名称を用いることとした。

3．本調査は、郡山市と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社との間に締結された委託契約に基づき、公益財団法人郡山市文化・学び振興公社が実施した。

4．現地調査から報告書刊行までの費用は、国庫補助金と市費より成る。

5．本書は、公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センターが編集し、郡山市教育委員会が発行した。

6．本書の執筆は、第２章第１節を郡山市文化スポーツ部文化振興課の佐藤常雄が担当し、第１章第２節は佐藤と高田が、その他は高田が行った。但し、第１章第２節のうち、正直古墳群の調査概要については、図を含めてその多くを平成８年度に刊行された『正直Ｂ遺跡－発掘調査報告書－』から転載し、15号墳の部分のみ高田が行った。

7．本書に掲載した遺構図・遺物図は、高田と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター臨時職員の吉田イチ子・橋本明子・今泉淳子が作成した。

8．本書に掲載した遺構・遺物の写真は、高田が撮影した。また、空中写真は、日本特殊撮影株式会社に委託してドローンで撮影した。

9．本書に掲載した１／50,000地形図（第１図）は、国土交通省国土地理院発行の地形図を複製したものである。また、１／5,000地形図（第２図）は、国営総合農地開発事業母畑地区の計画平面図（１／1,000）を縮小複製したものである。

10. 測量基準点の座標値は、世界測地系平面直角座標第Ⅸ系による。また、遺構図の方位は、座標北を示す。

11. 調査に関わる記録・資料・出土遺物は、郡山市教育委員会が保管する。

目　　次

序　　文
調査要項
例　　言

第１章　位置と環境……1
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1

第２章　調査の経緯……21
　第１節　調査に至るまで……21
　第２節　調査経過……21

第３章　調査報告……25
　第１節　正直21号墳……25
　第２節　正直20・43号墳……34

第４章　まとめ……36

写真図版

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　正直古墳群の位置と市内の主要古墳時代遺跡……3・4
第２図　正直古墳群・正直Ｂ遺跡と周辺の地形……11・12
第３図　正直11・12・13号墳……13
第４図　正直30・36号墳（１）……14
第５図　正直30・36号墳（２）……15
第６図　正直35号墳……16
第７図　正直15号墳（１）……17
第８図　正直15号墳（２）……18

第９図　正直20・21・43号墳測量基準点配置図…… 23
第10図　正直20・21・43号墳周辺測量図…… 24
第11図　正直21号墳測量図…… 27・28
第12図　削平部精査後の正直21号墳…… 29・30
第13図　正直21号墳墳頂削平部と陥没坑・１号撹乱坑…… 31
第14図　正直21号墳墳丘南側削平部第１トレンチと墳丘東側削平部墳丘断面見通し図…… 33
第15図　正直21号墳墳丘南側削平部１号溝跡土師器坩…… 34
第16図　正直20・43号墳測量図…… 35

写真図版目次

図版１　正直古墳群の位置（国土地理院の空中写真 1947 米軍空撮）
図版２　（１）正直古墳群遠景（南より）
（２）調査地区遠景（西より）
図版３　（１）正直20号墳（南東より）
（２）正直43号墳（北より）
図版４　（１）正直21号墳刈払い・伐採前（東より）
（２）正直21号墳刈払い・伐採後（南東より）
図版５　（１）正直21号墳刈払い・伐採後（西より）
（２）正直21号墳刈払い・伐採後（北東より）
図版６　（１）正直21号墳調査終了後全景（上方北）
（２）正直21号墳調査終了後遠景（南東より）
図版７　（１）正直21号墳墳頂削平部陥没坑・１号撹乱坑（上方北）
（２）正直21号墳墳頂削平部陥没坑（北より）
（３）正直21号墳墳頂削平部陥没坑断面（東より）
（４）正直21号墳墳頂削平部陥没坑・１号撹乱坑（東より）
（５）正直21号墳墳頂削平部１号撹乱坑断面（東より）
図版８　（１）正直21号墳墳丘南側削平部周溝検出状況（北より）
（２）正直21号墳墳丘南側削平部周溝断面（東より）
図版９　（１）正直21号墳墳丘南側削平部周溝断面（北東より）
（２）正直21号墳墳丘南側削平部１号溝跡土師器坩
（３）正直21号墳墳丘南側削平部１号溝跡土師器坩
（４）正直21号墳墳丘南側削平部１号溝跡出土土師器坩
図版10　（１）正直21号墳墳丘東側削平部２・３号溝跡検出状況（上方東）
（２）正直21号墳墳丘東側削平部墳丘断面（東より）

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

郡山市は、福島県のほぼ中央部に位置する。人口33万人余りを数える商・工業都市で、中心市街地は郡山盆地内にある。昭和39年の新産業都市、同61年のテクノポリス指定を経て、平成９年４月１日からは中核市へ移行している。気候的には、比較的穏やかな内陸性の気候であるが、西の奥羽山脈中に位置する湖南町や熱海町西部は冬季間の積雪量がかなり多い。

市街地のある郡山盆地は、安達郡大玉村・本宮市付近から須賀川市・白河市付近まで続く山間盆地の一部である。この盆地は、第三紀末のグリーンタフ造山期に阿武隈山地と奥羽山脈との間に起こった相対的沈降作用によって形成されたもので、縁辺に断層も認められることから断層盆地の特性も併せ持つ。盆地の基盤は、花崗岩類とそれを覆う第三紀層並びに白河石英安山岩質溶結凝灰岩から成り、盆地床の一部でこの基盤は300～400m高度の丘陵地を形成している。

盆地内を南北に貫流する阿武隈川は、西の奥羽山脈から笹原川・逢瀬川・藤田川・五百川、東の阿武隈山地から谷田川・大滝根川・桜川などの支流を集めて盆地東縁部を北流している。これらの大小河川の浸食により、盆地の大半を占める西岸の地域では東西方向に延びる複数列のなだらかな台地や扇状地地形が観察され、東岸では南東部の阿武隈川と谷田川に挟まれた地域に段丘地形や沖積低地をみることができる。また、谷田川東岸の田村町大善寺以北では、阿武隈山地に続く丘陵が樹枝状に開析され、複雑な地形を形成している。

今回調査を行った正直古墳群は、郡山市田村町正直に所在し、ＪＲ郡山駅の南約６㎞に位置する。付近は郡山盆地の南東部に当たり、西側を阿武隈川、東側を谷田川が流れ、北側には両河川によって形成された沖積低地が広がっている。古墳群は、両河川に挟まれた通称守山台地と呼ばれる砂礫台地の北端を占める正直Ｂ遺跡内に点在し、標高約240～250mの上～中位段丘面に築造されている。北側には沖積低地が広がり、東と西は沖積低地から入り込む開析谷に画されている。現地目は、山林と畑地である。

第２節　歴史的環境

昭和50年代以降、郡山市内においては、郡山東部地区の国営総合農地開発事業や東北自動車道・東北新幹線の建設、大規模な土地区画整理事業や多目的公園の建設等の大型開発に伴い、遺跡の発掘調査が進められ、数多くの貴重な資料が蓄積され、古墳時代の遺跡の広がりや時間的な推移が具体的に解明されてきている。ここでは、市内で発掘調査された古墳時代の遺跡を中心にその概要を記す。

東丸山遺跡　安積町成田字東丸山・清水台　註１

ほ場整備事業に伴い、昭和49年度に発掘調査が行われた。また、昭和59・60・62年度には、多目的公園「郡山カルチャーパーク」建設に伴い、大規模な発掘調査が行われた。両調査では、前期６棟、後期

中葉２棟、同後葉20棟の竪穴住居跡の他、縄文時代前期や平安時代の竪穴住居跡が検出されている。また、東西約100m、南北約60mの範囲から、前期の方形周溝墓６基、前～中期の土坑墓４基、中～後期の円形周溝墓６基が発見され、９号方形周溝墓からは、前期に比定し得る鉛製のペンダント（東日本では最古の鉛製品と推定）が出土している。

山中日照田遺跡　田村町大善寺字中山田　註２・３

大善寺古墳群と複合する遺跡である。国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、昭和56年度に大規模な発掘調査が行われた。また、平成10年には、無線基地建設に伴って小規模な発掘調査が行われた。昭和56年度の調査では、前期の竪穴住居跡40棟の他、中・後期、奈良・平安時代の竪穴住居跡などが多数検出されるとともに、前期の方形周溝墓や円形周溝墓も発見されている。また、平成10年の調査では、中期後葉の竪穴住居跡が２棟検出されている。山中日照田遺跡は、古墳時代前・中・後期を通して阿武隈川東岸地域の拠点的な集落跡と考えられている。

北山田遺跡　田村町上行合字北山田・中山田　註４～７

北山田古墳群と複合する遺跡である。公立学校敷地拡張工事に伴い、昭和60年度に発掘調査が行われた。また、昭和62・63年度には、国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、大規模な発掘調査が行われた。昭和60・63年度の調査では、古墳時代の遺構は確認されなかったが、同62年度の調査では前期５棟、中期９棟の竪穴住居跡が検出されている。いずれの調査区でも古墳の所在が確認されたことから、昭和60年度は古墳１基、同62年度は古墳２基、同63年度は古墳３基の調査が併せて行われている。

宮田Ａ遺跡　田村町上行合字宮田　註８

国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、昭和59年度に発掘調査が行われた。前期の方形周溝墓１基と中期中葉の方形周溝墓１基の他、方形周溝墓の可能性のある溝跡、時期不明の掘立柱建物跡や井戸跡などが検出されている。

徳定Ａ・Ｂ遺跡　田村町徳定字塚ノ越・芋干場　註９～12

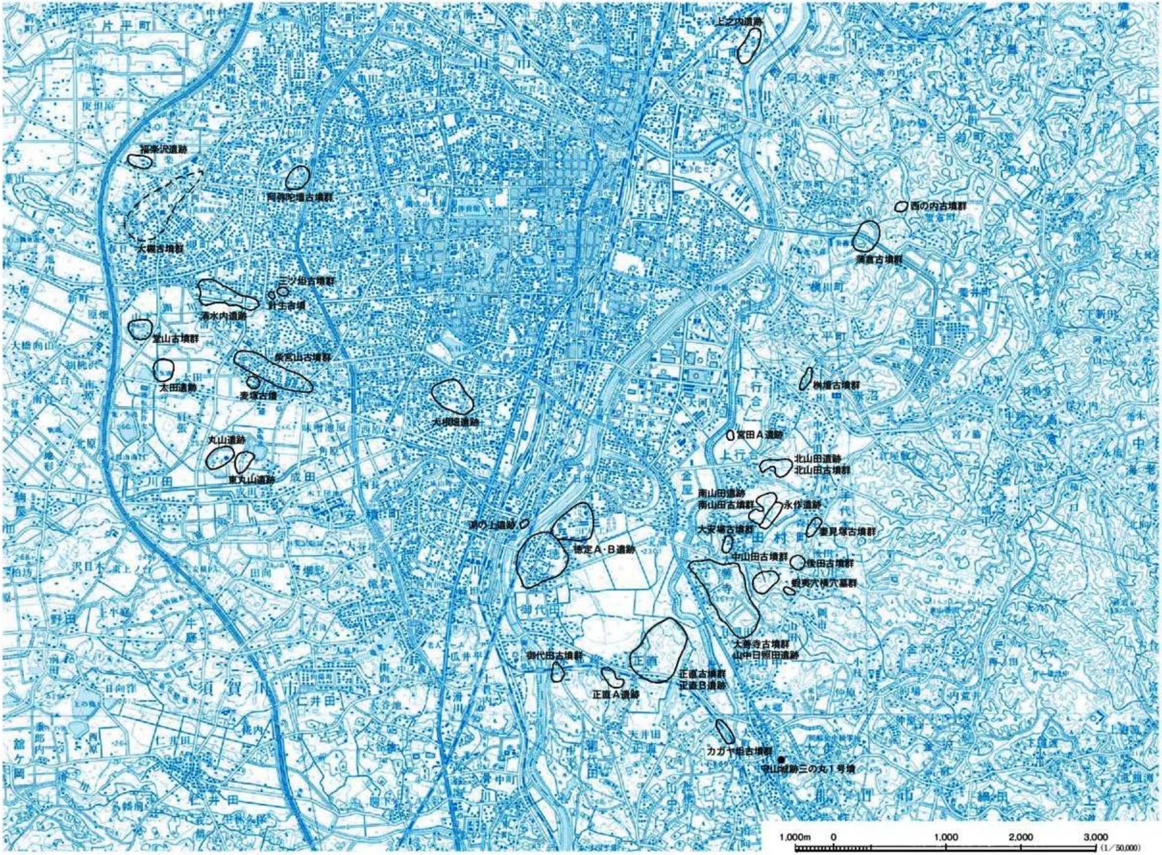
東北新幹線敷設工事に伴い、昭和47・49・50年度に発掘調査が行われた。また、平成17・20～24年度には、土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われた。両調査で検出された遺構の多くは、後期前半と奈良・平安時代の竪穴住居跡であったが、土地区画整理事業に伴う平成24年度の第６次調査では、前期の竪穴住居跡が２棟発見されている。

上之内遺跡　富久山町福原字上之内・陣場　註13

民間の宅地造成工事に伴い、平成７年度に発掘調査が行われた。前期の竪穴住居跡２棟の他、中世の集水遺構・溝跡・ピットなどの遺構が検出されている。

清水内遺跡　大槻町字人形坦東・上中谷地・中谷地、御前１・５・６丁目　註14

土地区画整備事業に伴い、平成７年度から同10年度にかけて大規模な発掘調査が行われた。前期１棟、鍛冶工房跡７棟を含む中期106棟の竪穴住居跡の他、奈良・平安時代の竪穴住居跡や中世の屋敷跡などが検出されている。また、中期の祭祀関連遺構として、一辺の長さが最大52mを測る矩形の区画遺構や祭祀遺物廃棄場、旧河川跡の祭壇状木組み遺構などが検出されている。中期の竪穴住居跡は、カマドの有無や出土した土師器の組成などから前・中・後葉の３時期に分けられ、前・中葉が主体を占める。清水内遺跡は、阿武隈川西岸における中期の中心的な集落跡と考えられている。



第１図　正直古墳群の位置と市内の主要古墳時代遺跡

大根畑遺跡　安積町荒井字大根畑　註15・16

土地区画整備事業に伴い、昭和62年度から平成３年度にかけて発掘調査が行われた。４次わたる調査で、主に後期前半と奈良・平安時代の竪穴住居跡が確認されている。平成元年度に行われた第３次調査では、中期前葉の竪穴住居跡も２棟検出されている。

永作遺跡・南山田遺跡　田村町手代木字永作、田村町上行合字南山田　註17～19

両遺跡は、ともに国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、大規模な発掘調査が行われた。昭和61年度の永作遺跡の調査では、中期後半の竪穴住居跡が30棟検出されている。また、平成元年度の南山田遺跡の調査では、同じく中期後半の竪穴住居跡が78棟発見されている。鉄滓・羽口・炉・鍛造剥片などがみつかった竪穴住居跡が、両遺跡ともに２棟ずつあり、これらは鍛冶工房跡と考えられている。また、永作遺跡では、１棟の竪穴状遺構から石製模造品の原石や作りかけの剣形石製模造品が出土しており、この遺構は石製模造品の製作工房跡と考えられている。さらに、両遺跡では、この時期としては珍しい須恵器が比較的多く出土している。同一丘陵上に隣接して所在する永作遺跡と南山田遺跡は、主たる遺構の時期や内容がほぼ同じであることから、中期後半における阿武隈川東岸地域の中心的な集落跡のひとつと考えられている。

正直Ａ遺跡　田村町正直字蓮沼　註20・21

古くから石製模造品が採集され、正直祭祀遺跡として知られた遺跡である。国営総合農地開発事業母畑地区に伴い、平成４年度に大規模な発掘調査が行われた。中期後半58棟、後期後半１棟の竪穴住居跡の他、奈良・平安時代の竪穴住居跡などが検出されている。中期後半の竪穴住居跡の中には、大量の石製模造品やその未成品・剥片などが出土したものが１棟あり、この遺構は石製模造品の工房跡と考えられている。また、屋外で土師器や石製模造品が集中して出土した地点が３か所検出され、これらは中期後半の祭祀跡と考えられている。正直Ａ遺跡は、正直古墳群と同一台地上の南西至近距離にあり、同古墳群の築造に関わる集落のひとつと考えられている。

太田遺跡　大槻町字太田北・北地蔵谷地　註22

昭和35年頃に遺跡の一部が開田され、その際多量の土師器が出土した。その破片の一部にモミ痕が観察されたことで、注目された遺跡である。県営ほ場整備事業に伴い、昭和48年に発掘調査が行われた。検出された遺構は竪穴住居跡11棟のみで、これらは１棟を除いて後期前半と考えられている。

丸山遺跡　安積町成田字丸山　註23

多目的公園「郡山カルチャーパーク」の建設に伴い、昭和62年度に大規模な発掘調査が行われた。後期前半の竪穴住居跡16棟の他、平安時代の竪穴住居跡や縄文時代前期の土坑などが検出されている。

三ツ坦古墳群　静町　註24

開発工事による削平を受けて、昭和59年２月に１・２号墳の緊急発掘調査が行われた。トレンチ法による墳丘と周溝の部分調査であったため主体部は確認されなかったが、周溝の状況と１号墳出土遺物から、ともに一辺16m前後の前期の方墳と考えられている。調査は行われなかったが、他に４基の円形周溝も確認されている。

大安場古墳群　田村町大善寺字大安場　註25・26

平成６年度の測量調査を受けて、平成８年度から同16年度にかけて保護・保存に向けた発掘調査が行

われた。前期後半の大型前方後方墳１基と中期後半の円墳４基が確認され、前方後方墳が国の史跡に指定されたことを契機として復元整備が進められ、現在では史跡公園となっている。前方後方墳である１号墳は、全長約83m、前方部２段、後方部３段の築成で、丘陵の突端を一部整形して構築されている。主体部は、長軸約10m、短軸約２ｍの長方形墓壙底面に粘土を貼って棺床としており、長さ約９ｍ、幅約１ｍの割竹形木棺が安置されたと推定されている。副葬品は、腕輪形石製品、鉄大刀、鉄槍、鉄剣、鉄鎌、鉄斧、剣形鉄製品、刺突具状鉄製品などが出土している。他に墳頂部やくびれ部などから多数の底部穿孔壺が出土しており、これらは墳頂部に立て並べられたと考えられている。２号墳は径約15mで、墳頂西寄りから組み合わせ式の箱式石棺が確認されている。５号墳は径約12mで、主体部は未確認である。３・４号墳は半分以上が開発行為により大きく削平されているが、周溝の形状などから円墳と推定されている。１号墳は、規模や出土品からこの地方の首長クラスの墳墓と考えられている。

大善寺古墳群　田村町大善寺字上野・上石切場　註27

山中日照田遺跡と複合する古墳群である。昭和20年代のはじめ頃、数基の古墳が発掘調査され、骨鏃などが検出されている。昭和47年には、郡山市教育委員会により削平された古墳の発掘調査が行われ、箱式石棺の主体部と人骨の一部が検出されている。また、山中地区では、耕作中、積土を失った古墳から数振の直刀が掘り出されている。台地の周縁を取り巻くように古墳群が形成されており、中には埴輪を立てた古墳もあったようで、これまでに４か所の地点で中期後半の埴輪が採取されている。現在確認できる古墳は、墳丘が僅かに遺存するものや石室が残るものなどが数基のみとなっており、以前出土した土器や聞き取り調査の結果の他、山中日照田遺跡として調査した周溝墓群を加えれば、前期の古墳から横穴式石室をもつ後期の古墳まで、各時期の古墳が存在していた可能性が高い。

阿弥陀壇古墳群　大槻町字柏山　註28

土地区画整備事業に伴い、昭和53年度に発掘調査が行われた。当初は、墳丘が確認できた３基を調査する予定であったが、周溝のみが遺存するものが新たに２基発見され、最終的に方墳１基と円墳４基の調査となった。各古墳の時期は、方墳が中期前半、円墳が後期と考えられている。１号墳は一辺25m前後の方墳で、主体部は墳頂北寄りで検出された。竪穴式の墓壙内に棺の痕跡が確認できなかったため、直葬と考えられている。３号墳は、径約14mの円墳である。主体部は横穴式状で、壁面を粘土で構築した玄室に木棺が納められたと考えられている。６号墳は径18m前後の円墳で、主体部は掘方のみが検出された。凝灰岩の破片が多数出土したことから横穴式石室と考えられている。４・５号墳はどちらも墳丘が削平され、周溝のみが検出されている。径18～20m前後の円墳と推定されている。

北山田古墳群　田村町上行合字北山田・中山田　註29～32

北山田遺跡と複合する古墳群である。13基確認されている。公立学校敷地拡張工事に伴い、昭和52年度と同60年度に発掘調査が行われた。また、昭和62・63年度には、国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、大規模な発掘調査が行われた。方墳１基（１号墳）、帆立貝形古墳１基（２号墳）、円墳５基（３・４・10・12・13号墳）の計７基が調査されている。帆立貝形古墳は全長約24mで、主体部は２棺並列の木棺直葬、時期は中期中葉頃と考えられている。一辺10m前後の方墳は、周溝や主体部は検出されなかった。中期後半以降と推定されているが、積土から鉄鎗やロクロ土師器がみつかっていることから、後世の塚跡との指摘もある。５基の円墳は径約14～21mで、いずれも帆立貝形古墳築造前後の時期

が想定されている。未調査の古墳６基は、現況ですべて円墳と推定されている。

南山田古墳群　田村町上行合字南山田　註33・34

南山田遺跡と複合する古墳群である。国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴う南山田遺跡の発掘調査の際に、中期の円墳１基（南山田１号墳）と円形周溝３基が検出されている。円墳は径16m前後で、主体部は検出されなかった。周溝から、小型脚付把手付壺と呼ばれている陶質土器に似た特殊な土器が出土している。現在は、かぶつ壇古墳と呼ばれている円墳１基が遺存しているが、隣接する桜ケ丘団地造成時に複数の古墳が破壊されたという聞き取りがある。

中山田古墳群　田村町大善寺字中山田　註35

細い谷を挟んで大善寺古墳群の北東に位置する古墳群である。径10～20m程度の円墳が11基確認されているが、発掘調査が行われていないので詳細は不明である。

妻見塚古墳群　田村町手代木字妻見塚　註36

妻見塚遺跡と複合する古墳群である。径10m前後の円墳が10基確認されている。中には、天井石や門柱石が露出しているものがあることから、横穴式石室を伴う後期の古墳群と考えられている。国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、昭和60年度に妻見塚遺跡として発掘調査が行われた地区で、石室の底石と考えられる石組が２か所検出されている。

桝壇古墳群　田村町下行合字朝日舞　註37

下永田Ｂ遺跡と複合する古墳群である。径10m前後の円墳が11基確認されている。県道飯豊郡山線建設工事に伴い、昭和60年度に下永田Ｂ遺跡として発掘調査が行われた地区で、天井石と周溝のみが遺存する古墳が１基検出されたことから、横穴式石室を伴う後期の古墳群と考えられている。

御代田古墳群　田村町御代田字中林　註38

径10m前後の円墳が９基確認されている。昭和30年に、福島考古学会によりすでに露出していた横穴式石室の発掘調査が行われ、耳環１点と石製模造品が出土している。後期の古墳群と考えられている。

カガヤ坦古墳群　田村町守山字カガヤ坦　註39

22基の古墳が確認されている。発掘調査が行われていないので詳細は不明だか、方墳１基を含み、小型の前方後円墳ないし前方後方墳らしい高まりもみられる。時期は、前期～中期と考えられている。

福楽沢遺跡１・２号墳　大槻町字蝦夷坦　註40

弥生土器の散布地として注目され、昭和44年度に遺跡の内容把握のため行われた試掘調査の際に、隣接する複数のトレンチにまたがって検出された。両古墳ともすでに墳丘は削平されており、１号墳では径10m前後の周溝と横穴式石室の基底部が調査され、２号墳では周溝の一部のみの発掘となった。両古墳の時期は、後期後半と考えられている。

麦塚古墳　大槻町字麦塚　註41

市の重要遺跡の記録保存を目的として、昭和35年に発掘調査が行われた。周溝の有無は確認されていないが、出土した埴輪の配列などから全長26m前後の前方後円墳と推定されている。主体部は、盗掘坑や一字一石経を埋納した経塚により大きく破壊されていたが、僅かに残る石室内から直刀片、耳環、鉄鍔など、墳丘中から円筒埴輪や家形・人物・器財などの形象埴輪が出土している。時期は、後期前半と考えられる。

渕ノ上１・２号墳　安積町笹川　註42

阿武隈川上流改修工事に伴い、昭和46年度に行われた渕ノ上遺跡の発掘調査の際に検出された。両古墳ともすでに墳丘は失われており、１号墳では周溝の一部と横穴式石室の基底面が調査され、２号墳は横穴式石室の基底面のみの発掘となった。玄室の平面形はともに胴張気味で、１号墳からは頭椎太刀や鉄製胄とそれに付属する小札などが出土している。時期は、後期後半と考えられている。

守山城跡三の丸１号墳　田村町守山字三ノ丸　註43

小学校体育館増・改築工事に伴い、平成22年度に行われた守山城跡の第５次発掘調査の際に検出された。墳丘はすでに失われており、横穴式石室の基底面と周溝の一部が調査された。石室底面から須恵器高坏・土製丸玉・土製勾玉・耳環・刀子・鉄鏃などが、周溝から円筒埴輪・須恵器甕などが出土している。周溝の半分以上が調査区外となっているため墳形は確定できないが、全長20m以上の前方後円墳と推定されている。時期は、後期前半と考えられている。

大槻古墳群　大槻町字西ノ宮西・新池下・御花畑　註44

すでに消滅した古墳群である。長くその位置や数が不明であったが、昭和13年に作成された分布図が公開された。この分布図には、多数の古墳とともに現在も位置を変えずに残っている池や道路も描かれている。また、前記した三ツ坦古墳群、阿弥陀堂古墳群、福良沢１・２号墳などの発掘調査が行われた古墳も記載されていることから、当時の古墳分布の様子をかなり正確に示している。これによれば、現在の大槻町字西ノ宮西・新池下・御花畑辺りに100基前後の古墳があったとみられる。なお、この分布図には、詳細は不明ながら昭和45年に１基の調査が行われた堂山古墳群、現在では宅地化により墳丘が確認できない榮宮山古墳群なども記載されている。

針生古墳　静町　註45

多数の古墳が消滅した大槻地区の中で、破壊を免れた古墳として郡山市の史跡に指定されている。昭和25年に発掘調査が行われているが詳細は不明である。後期の円墳と考えられている。

蒲倉古墳群　蒲倉町字カチ内・横川町字大谷地ほか　註46～52

古墳群の内容把握のため、昭和47年度に一部の古墳の発掘調査が行われた。また、平成３年度には、古墳公園として保護・保存、整備・活用を図るため、分布調査・試掘調査が行われた。さらに、平成９・10・11・12・19・20年度には、基礎資料収集を目的として合せて21基の発掘調査が行われた。これらの調査により、墳丘が遺存していないものも含めて71基の所在が確認され、径５～10m前後の円墳群であること、主体部が遺存するものは横穴式石室であること、追葬が行われたものがあること、追葬時に石室の前で火を焚いたものがあることなどが明らかになった。築造時期は、後期後半と考えられている。

西の内古墳群　蒲倉町字西の内　註53

蒲倉古墳群の北東約500mの丘陵上に位置する。現在、10基の存在が確認されている。発掘調査が行われていないので詳細は不明であるが、墳丘規模や石室の状況が蒲倉古墳群と類似していることから、同古墳群とほぼ同時期の築造と考えられている。

蝦夷穴横穴墓群　田村町小川字下田　註54

市内唯一の横穴墓群である。市単独農道改良工事に伴い、平成13年度に発掘調査が行われた。横穴墓は以前から11基確認されていたが、この調査では、法面工事で新たに発見された２基と墓群前面の農道

部分が対象となった。２基の横穴墓はともに盗掘を受けていなかったため、玄室内から方頭太刀、太刀、刀子、鉄鏃、ガラス製小玉、鉄鍔などが出土している。農道部分では複数の溝跡が検出され、これらは墓域を区画する溝や横穴墓に通じる墓道と考えられている。時期は、後期後半と考えられている。

正直古墳群　田村町正直字除古・竹ノ内ほか　註55～60

正直Ｂ遺跡と複合する古墳群である。昭和39年に初めて分布図が作成され、これにより墳丘を失った古墳２基を含めて35基が知られた。その後、昭和56年度の30号墳発掘調査、平成３年度の35号墳測量調査・分布調査、同７年度の15号墳発掘調査の際に、新たに確認された古墳が追加され、現在では43号まで番号が付けられている。これらは、前方後方墳１基、方墳数基と円墳で構成され、築造時期は前期～中期とみられている。発掘調査が行われたもの、未調査のまま墳丘を失ったものなどが含まれているが、現在では墳丘ないし墳丘状の高まりが観察できるものは23基といわれている。発掘調査が行われた古墳は、９・11～13・15・18・23・27・30・36号墳の10基で、このうち９・18号墳については当時の記録等の所在が不明である。11～13・23・27・30・36号墳の調査概要については、15号墳の調査報告が掲載されている『正直Ｂ遺跡－発掘調査報告書－』の第１章第２節で詳しく述べられているので、以下に図を含めてその部分を抜粋・転載する。また、15号墳の調査概要については新たに付け加える。

正直11・12・13号墳（第３図）は、昭和51年に個人の宅地造成に伴って郡山市教育委員会が調査した。11・12・13号墳は正直古墳群の中でも多数の古墳が密集する南ブロック西端の開析谷面に位置している。３基の中では最も西に位置する11号墳は、周溝幅を含めない内寸規模が9.5mの円墳で、箱式石棺の残欠が旧表土の上面から検出された。主体部から遺物は出土していないが、周溝内から南小泉式中～後半段階の土師器坏・坩が得られている。中央に位置するのが12号墳で、内寸の規模・形状は11号墳と同様であるが、古墳の遺存状態が悪かったため主体部は検出されていない。周溝内から、南小泉式中～後半段階の土師器坏・高坏・甕が出土している。東に位置する13号墳は、内寸規模が20m・墳丘高２m余りの円墳で、想定長300cm、幅110cmの割竹形木炭槨（？）が検出されている。遺物は、主体部から鉄鏃、臼玉が、周溝からは双孔の石製模造品が南小泉式中～後半段階の土師器坏・坩・鉢などとともに出土している。また、墳丘内から、勾玉形の石製模造品が出土している。なお、これらの古墳と東に位置する15号墳には空間があり、墳丘を消失した古墳跡が存在する可能性がある。この空間については、昭和51年に調査は行われていないが、同地区の一部は県道の拡幅予定地に含まれていることから、近い将来に古墳跡の有無を確認できるものと考えている。

正直23号墳は、昭和24年に福島県学生考古学会の梅宮茂氏らによって主体部のみの調査が行われている。主体部は木炭槨と粘土槨（？）で、木炭槨から櫛・琥珀玉・刀子形の石製模造品が出土している。23号墳はその後、昭和60年に財団法人東洋文化財研究所よって墳丘の測量調査が行われ、現存する規模が東西26m・南北23m・高さ2.5mで、墳形は円墳である可能性が指摘されている。23号墳は、他の多くの古墳とは開析谷によって画された狭い丘陵上に位置し、同じ丘陵に隣接する22号墳や北側の方墳と思われる28・29号墳とブロックを形成している。また、23号墳の南には正直館跡が丘陵央部の広いスペースを占有しており、この館によって数～10基前後の古墳が消滅したものと考えている。

正直27号墳は、開畑時に朱塗りの箱式石棺が発見されたため、昭和45年に郡山市教育委員会が調査を行った。27号墳は、正直古墳群のほぼ中央にあり、24～26号墳とともに１グループを形成している。同

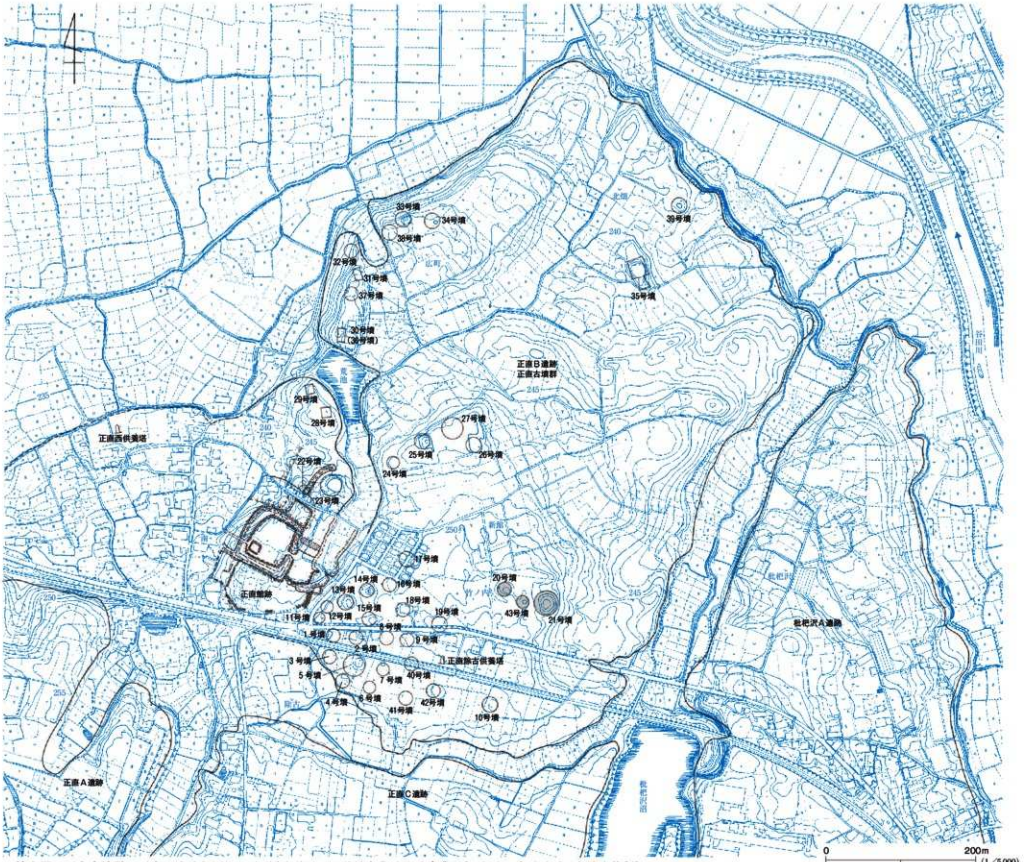
墳は、墳丘規模が径25～26ｍの円墳と考えられ、主体部は南北に２棺検出された。ともに箱式石棺で、２室構造の北棺からは人骨３体分と鹿角装の剣・同刀子・直刀・鉄斧・ガラス玉・臼玉・石製模造品（剣・双孔円板・単孔円板）が、南棺からは鉄鏃・鉄斧・石製模造品（斧・剣・刀子・双孔円板・単孔円板）などの副葬品が豊富に出土している。27号墳は、これらの副葬品から５世紀の中葉期に築造されたものと思われるが、周溝の調査を行っていないため土器が出土しておらず、時期の確定が難しい。

正直30号墳（第４図）は、正直古墳群の北西地区にあり、31・32・37号墳が同一丘陵上にある。また、開析谷を挟んだ北側の台地先端には33・34・38号墳が別グループを形成している。この古墳は、個人の宅地造成に伴い郡山市教育委員会が昭和57年度に調査を行い、南北22.5ｍ、高さ1.5ｍの長方墳であることを確認している。墳頂部から２棺並列の直葬墓が検出され、中央に位置する２号主体部が先行するものと思われる。この主体部からは刀子・瑪瑙製勾玉・管玉・ガラス玉が、北にある１号主体部からは管玉・琥珀玉・臼玉と石製模造品（剣・刀子・双孔円板・単孔円板）が出土し、各主体部の副葬品の違いが指摘されている。

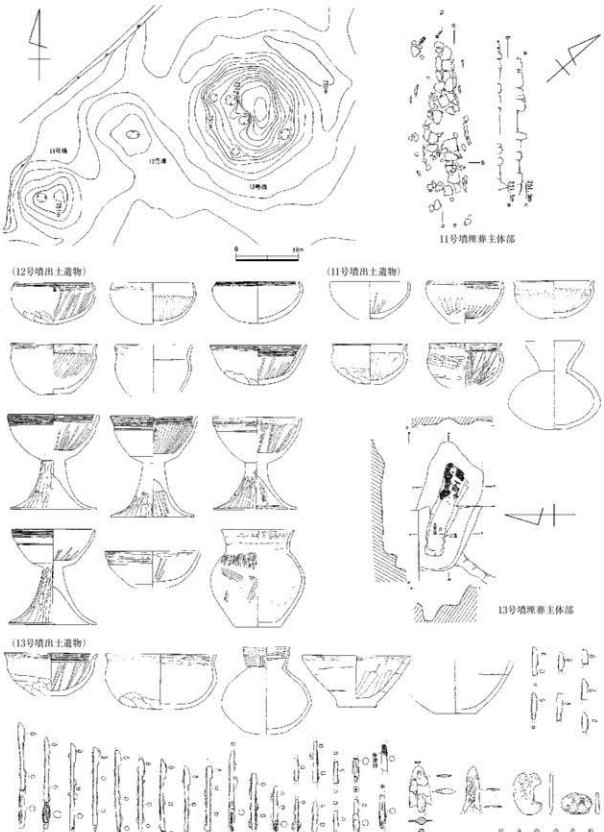
正直36号墳（第５図上段）は、30号墳の周溝内で確認された排水施設のある礫槨で、30号墳の周溝内主体部である可能性が高い。礫槨の規模は長440㎝以上・幅240～250㎝で、副葬品として石製模造品（剣・双孔円板・単孔円板）が出土している。時期は、埋土中から出土した土師器坏から５世紀後半と考えられ、先行すると思われる30号墳もほぼ同時期であると考えている。30号墳の調査では、36号墳以外に墳丘下から弥生後期の竪穴住居跡３棟と墳丘裾から奈良時代の合口甕棺１基（第５図下段）も確認されている。

正直35号墳（第６図）は、当初中期の前方後円墳と考えられていたが、穴沢咏光氏の前方後方墳ではないかとの指摘を受けた柳沼賢治氏などによる測量調査で前方後方墳であることが確認されている。調査は平成３年に実施され、これによって後方部がやや縦長（22×25ｍ）で、全長は37ｍであることが判明した。また、測量報告の中で明言は避けながらも35号墳が４世紀代の古墳であることを指摘している。また、既調査の古墳が５世紀後半に偏っていることから、今後は35号墳に後続する中期前半の古墳が存在するか否かを確認し、正直古墳群形成の契機をさぐることが必要であるとの提言がなされた。この後、35号墳の築造時期については、谷田川を挟んだ対岸から発見された前方後方墳の大安場古墳との比較で、４世紀でもやや古い時期との考えも提示されている。

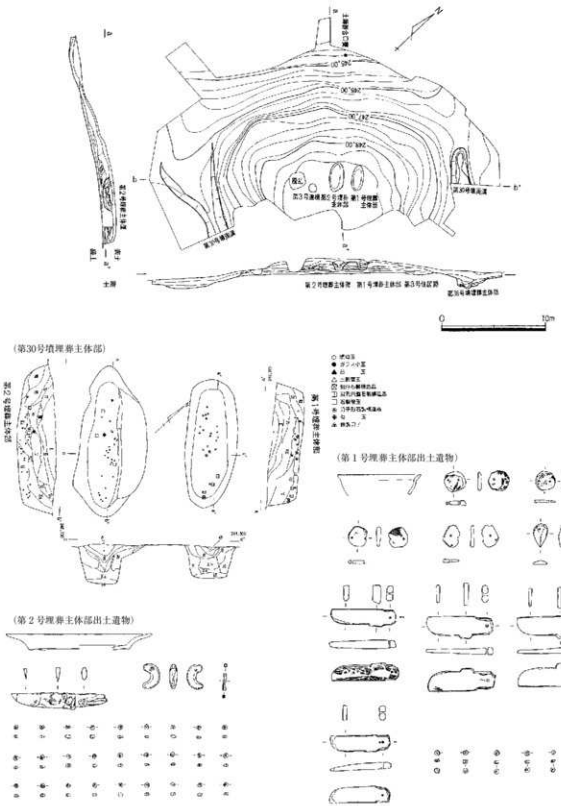
正直15号墳（第７・８図）は、11～13号墳と同じく古墳が集中する南ブロックに位置する。県道拡幅工事に伴い、複合する正直Ｂ遺跡とともに平成７年度に発掘調査が行われた。周溝内寸径が約20ｍの円墳で、墳端と周溝の間にテラスが存在した可能もあったことから、テラスがある場合とない場合の２種類の図面が作成されている。テラスが存在した場合は、墳丘規模は約14ｍとなる。主体部は確認されていないが、墳頂部や周溝上層から凝灰岩片が出土したことから、箱式石棺であったと考えられている。周溝内・墳丘下の旧表土直上面・墳丘積土から、土師器坏・高坏・坩・甕・須恵器甕・石製模造品（双孔円板）と弥生土器などが出土しており、土師器坏や坩の特徴から築造時期は中期後半と考えられている。なお、周辺の正直Ｂ遺跡に当たる部分の調査では、東側で土坑墓３基、北側で弥生時代後期の竪穴住居跡２棟などが確認されている。土坑墓は、土器が出土していないため時期は明らかでないが、隣接古墳との位置関係や堆積土中の火山灰（ＦＰ）の有無などから、中期後半から後期前半と考えられている。



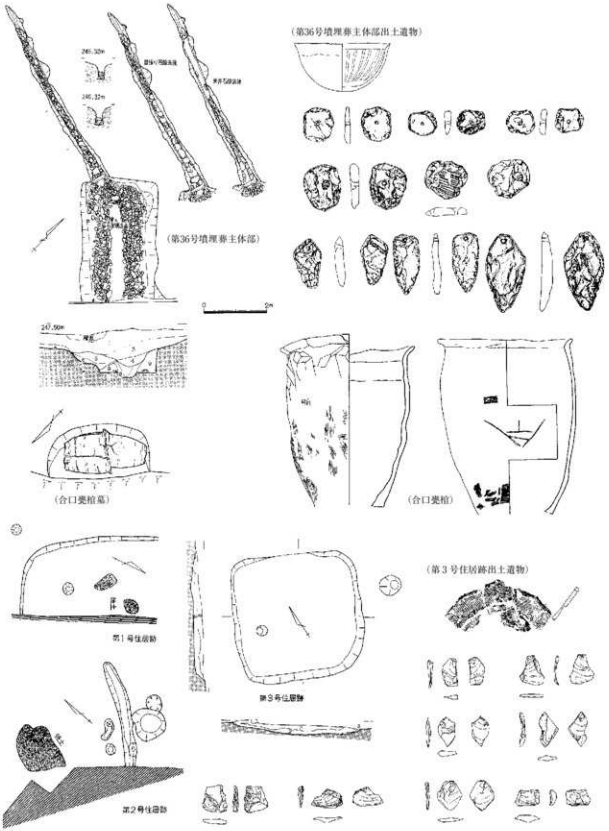
第2図　正直古墳群・正直B遺跡と周辺の地形(地形図は国営総合農地開発事業母畑地区の計画平面図を縮小複製)



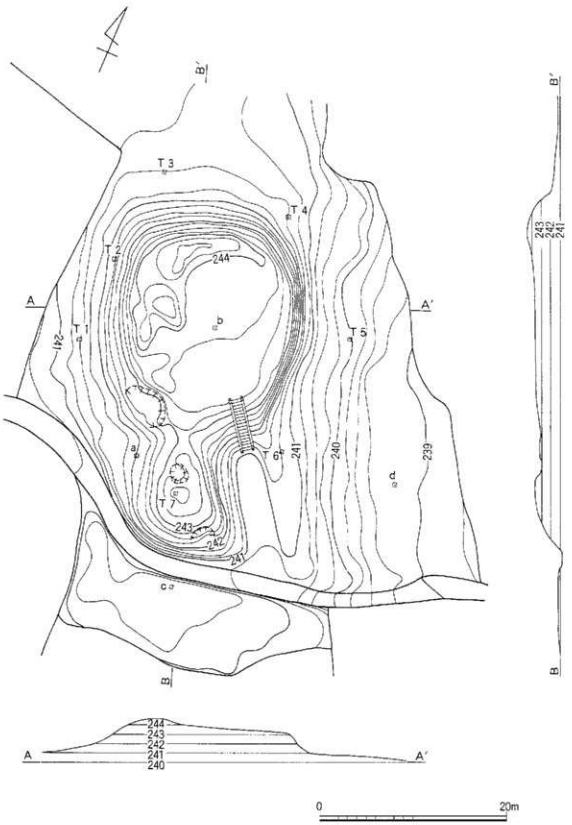
第３図　正直11・12・13号墳



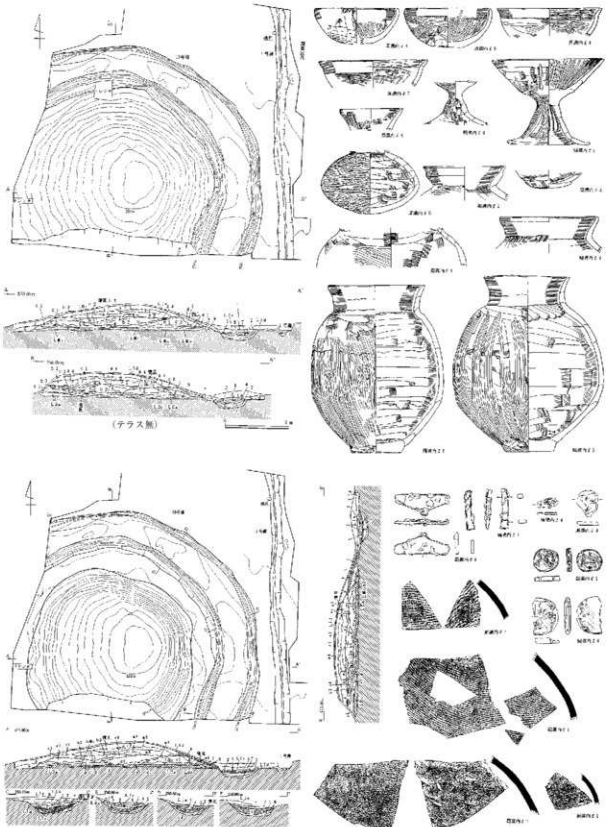
第４図　正直30・36号墳（１）



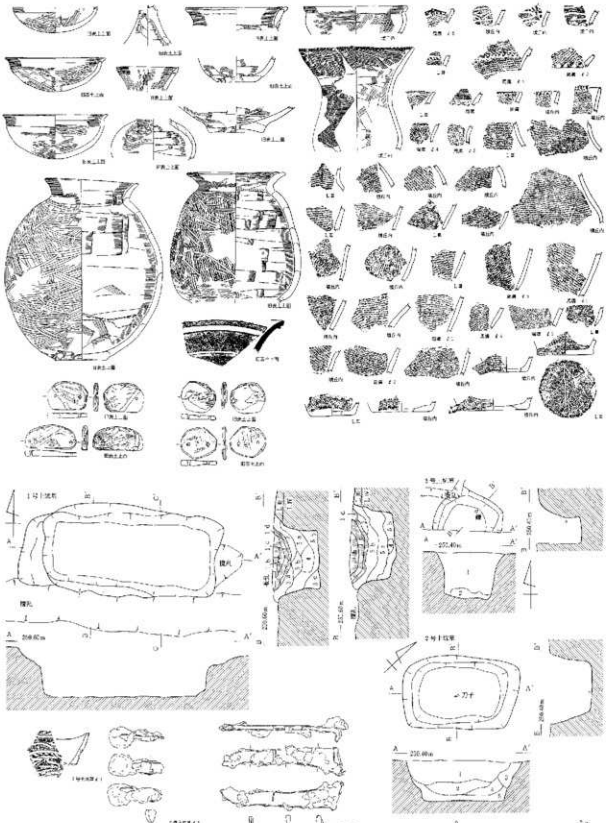
第５図　正直30・36号墳（２）



第6図　正直35号墳



第７図　正直15号墳（１）



第８図　正直15号墳（２）

＜註＞

1　鈴木雄三　1987　『東丸山遺跡」郡山カルチャーパーク関連報告第１集　福島県郡山市都市計画部・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

2　高松俊雄・柳沼賢治ほか　1982　「大善寺地区遺跡」「郡山東部Ⅱ」福島県郡山市教育委員会

3　石山　淡　1999　「山中日照田遺跡－第２次調査報告」エヌ・ティ・ティ東北移動通信網株式会社・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

4　柳田和久・高松俊雄　1986　『北山田遺跡　発掘調査概報」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

5　柳田和久・高松俊雄　1986　「北山田２号墳　発掘調査概報」福島県郡山市教育委員会

6　柳田和久・高松俊雄　1988　「北山田遺跡・北山田３号墳」「郡山東部８」福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局

7　高松俊雄　1989　「北山田遺跡」「郡山東部９」福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局

8　柳沼賢治　1985　「宮田Ａ遺跡」「郡山東部Ⅴ」福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局

9　木元元治ほか　1981　「徳定遺跡」「東北新幹線関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ」福島県教育委員会・日本国有鉄道

10　柳沼賢治　2014　「徳定Ａ・Ｂ遺跡－第１・２次発掘調査報告－」福島県郡山市都市整備部・福島県郡山市教育委員会・公益財団法人郡山市文化・学び振興公社

11　柳沼賢治　2015　「徳定Ａ・Ｂ遺跡－第３・４次発掘調査報告－」福島県郡山市都市整備部・福島県郡山市教育委員会・公益財団法人郡山市文化・学び振興公社

12　柳沼賢治　2016　「徳定Ａ・Ｂ遺跡－第５・６次発掘調査報告－」福島県郡山市都市整備部・福島県郡山市教育委員会・公益財団法人郡山市文化・学び振興公社

13　高松俊雄　1996　「上之内遺跡」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

14　高松俊雄ほか　1999　「清水内遺跡－６・８・９区調査報告－第１冊」郡山市御前南土地区画整理組合・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

15　柳沼賢治　1987　「大根畑遺跡－発掘調査報告書－」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

16　穴澤武泰　1991　「大根畑遺跡－第４次発掘調査報告書－」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

17　柳沼賢治　1987　「永作遺跡」「郡山東部７」福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局

18　柳沼賢治　1990　「南山田遺跡」「郡山東部10」福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局

19　柳沼賢治　1991　「南山田遺跡　第一冊」農林水産省東北農政局・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

20　郡山市　1975　「資料（上）」「郡山市史」第８巻

21　山内幹夫ほか　1994　「正直Ａ遺跡」「母畑地区遺跡発掘調査報告34」福島県教育委員会

22　田中正能　1974　「太田遺跡」郡山市教育委員会

23　鈴木雄三　1988　「丸山遺跡」郡山カルチャーパーク関連報告第２集　福島県郡山市都市計画部・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

24　高松俊雄ほか　1984　「三ツ沮古墳群・史跡宇津峯」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

25　柳沼賢治　1997　「大安場古墳群－第１次発掘調査報告－」福島県郡山市教育委員会

26　柳沼賢治　1999　「大安場古墳群－第３次発掘調査報告－」福島県郡山市教育委員会

27　註２文献の第９章総括終わりに、註20文献の第１編考古個別解説22、註25文献の第１章第２節歴史的環境などを参照した。

28　金崎佳生・高松俊雄ほか　1979　「阿弥陀堆　古墳群発掘調査概報」福島県郡山市教育委員会

29～32　註４～７文献と同じ

33・34　註18・19文献と同じ

35　註25文献の第１章第１節歴史的環境に記載された内容を参照した。

36　高松俊雄　1986　「妻見塚遺跡」『郡山東部６』福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局

37　柳沼賢治　1986　「下永田Ｂ遺跡－発掘調査報告書－」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

38　佐藤雄寿　1960　「田村郡御代田古墳調査」『福島県埋蔵文化財調査報告書』福島県教育委員会

39　註25文献の第１章第１節歴史的環境に記載された内容を参照した。

40　伊東信雄　1971　「郡山市福楽沢遺跡発掘調査報告書」福島県郡山市教育委員会

41　田中正能ほか　1962　「福島県郡山麦塚古墳」福島県郡山市教育委員会

42　田中正能ほか　1971　「福島県郡山市潤の上遺跡発掘調査概報－阿武隈川上流改修工事文化財調査－」東北地方建設局福島工事事務所・福島県郡山市教育委員会

43　押山雄三　2011　「守山城跡で発見された古墳」大安場史跡公園平成23年度第１回歴史講座発表資料

44　垣内和孝　1994　「松井綾夫著『安積郡大槻村に於ける遺跡遺物の研究』の紹介と若干の検討－特に「大槻村古墳墳丘分布図」を中心に－」『研究紀要』第１号　財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

この文献の中で執筆者は、「大槻村古墳墳丘分布図」にある古墳の位置を現在の地図に落とし込んだ「大槻町古墳分布推定図」を作成しているが、その中で、古墳の分布に数か所のまとまりがあると捉え、北ノ山墳（字新池下・御花畑）に集中する73基余りの古墳を大槻古墳群と呼称することを提唱している。

45　郡山市教育委員会　2001　「郡山市の文化財　保存版」

46　柳沼賢治　1992　「蒲倉古墳群－分布調査・試掘調査報告－」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

47　垣内和孝ほか　1998　「蒲倉古墳群－測量調査・補足調査報告－」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

48　高松俊雄ほか　1998　「蒲倉古墳群－55・56・57号墳調査報告－」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

49　鳴原靖彦・垣内和孝ほか　1999　「蒲倉古墳群－第５次調査報告－」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

50　垣内和孝・菅野直美　2000　「蒲倉古墳群－第６次調査報告－」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

51　垣内和孝・菅野直美　2001　「蒲倉古墳群－第７次調査報告－」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

52　柳沼賢治　2009　「蒲倉古墳群－第８・９次調査報告－」福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市文化・学び振興公社

53　註25文献の第１章第２節歴史的環境や註47文献の第１章位置と環境に記載された内容を参照した。

54　高松俊雄・佐久間正明　2002　「暇夷穴横穴墓群－12・13号横穴調査報告－」郡山市農林部・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

55　福島県　1964　「資料編一　考古資料」『福島県史』第６巻

56　註20文献と同じ

57　佐藤満夫・高松俊雄　1977　「正直11・12・13号墳－発掘調査概要－」福島県郡山市教育委員会

58　吉田幸一・高松俊雄ほか　1982　「正直古墳群第30・36号墳－発掘調査概要－」福島県郡山市教育委員会

59　柳沼賢治・押山雄三・仲田茂司　1991　「郡山市正直35号墳の測量調査」『福島考古』第32号　福島県考古学会

60　押山雄三　1996　「正直Ｂ遺跡－発掘調査報告書－」福島県県中建設事務所・郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

第２章　調査の経緯

第１節　調査に至るまで

田村町正直地内には、県道田村安積線を挟んで、弥生、古墳、奈良、平安時代の周知の遺跡として、正直Ａ遺跡・正直Ｂ遺跡・正直Ｃ遺跡が所在し、市内の重要遺跡となっている。特に、正直Ｂ遺跡には40基余りの正直古墳群が存在し、近年の開畑及び宅地化などによって古墳の消滅が危惧されている。

平成28年９月に、民間業者による開発行為によって、正直21号墳の一部が崩されているとの地元住民からの通報により、直ちに現地確認の上、民間業者に古墳に対する開発行為の停止と古墳の保存について協力依頼を行った。その後、文化庁並びに県文化財課担当職員の現地調査と指導・助言を踏まえ、郡山市の重要遺跡を保護する観点から、古墳の実態把握、保護・保存を目的とした調査計画を策定し、平成29年度から国庫補助を受けて調査を開始した。調査を進めるにあたっては、正直古墳群の基幹となる21号墳、35号墳、27号墳とその周辺の古墳をグループ分けし、順次調査を進めながら古墳群の時期変遷など実態解明に向けて今後も継続して調査を行う予定である。

今年度は、古墳群の南部に位置する、一辺30ｍ前後の方墳と想定されている21号墳と近接する20・43号墳を含めた2,800㎡を調査対象とした。７月に地権者から発掘の承諾を得、調査範囲確認後、７月31日付けで郡山市と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社との間で発掘調査委託契約を結び、８月には99条による発掘届を県へ提出、正直地区民への回覧による発掘調査の周知を行い、現地調査を開始した。

また、調査に先立ち、正直Ｂ遺跡（重要遺跡「正直古墳群」）調査保存に係る懇談会を設け、７月７日の第１回の懇談会で発掘調査の方針、内容、方法等について指導・助言を受けて実際の調査を進めることとした。９月に調査範囲の刈払い及び伐採を終了し、その後、10月に調査部分の地形測量と古墳測量を終えた段階で、第２回懇談会を開催した。古墳の形状確認のために周溝部分の一部を拡張することになり、追加の刈払い及び伐採を行った後、測量図を補足し、正直21号墳の墳丘、周溝部分の確認調査を進めた。第３回懇談会で調査の進捗状況を確認のうえ、古墳の規模及び古墳の築造方法について調査を進め、11月末を以って今年度の現地調査を一旦終了した。今年度は古墳の削平部分を主に調査し、表土が残る部分を含めた範囲を対象とした調査は次年度に行うこととした。12月から屋内作業に入り、現地調査の記録整理及び報告書の発行にあたった。

第２節　調査経過

屋外調査は、９月１日着手し、11月30日に終了した。今年度は、３基の古墳の形や大きさを確定することに主眼が置かれたが、周辺に屋敷神や近世の墓碑がある20・43号墳については、現状変更の可能性が低いとの判断から測量調査で止めた。また、一部が削平された21号墳については、削平の度合を明らかにするとともに、この部分を利用して埋葬施設の有無や周溝・墳丘積土の状況を把握することに努め

たが、調査期間の都合で詳細な大きさや埋葬施設の確認までには至らなかった。なお、測量基準点は、21号墳の東裾とその北側に世界測地系の座標が乗る杭（Ｔ１・２）が、地権者によって打設されていたことから、これらを利用してＴ16まで設定した。また、標高については、四等三角点「蓮沼(標高253.34m)」からＴ３に移動し、測量基準点とは別に測量箇所に応じて複数のベンチマークを設定した。古墳の測量に当たっては、全体・個別ともに縮尺100分の１とし、10cm間隔の等高線で原図を作成した。また、その他の図は、適宜縮尺を選択しながら採取した。以下に調査日誌の概要を記す。

９月１日（金）　20・43号墳側から21号墳に向かって、密集・繁茂する篠竹の刈払いを開始する。
９月11日（月）　刈払い後に露出した雑木を伐採し、篠竹とともに調査地区東端への運搬を開始する。
９月21日（木）　刈払い・伐採、運搬作業をほぼ終了する。21号墳はかなり大きな古墳と認識する。
９月22日（金）　21号墳の現況測量に向けて、削平された部分の粗精査を開始する。１年以上放置されていたため、流出土や汚れた土がかなり堆積していることが確認される。
９月29日（金）　21号墳墳頂に測量基準点Ｔ３を打設。同墳から現況測量を開始する。
10月10日（火）　21号墳の測量終了。引き続き20・43号墳の測量に入り、12日をもって終了する。
10月11日（水）　21号墳墳丘南側削平部精査。流出土・汚れた土の除去作業を開始する。地山面に周溝がみえはじめ、その南側で東西に延びる１号溝跡を検出。検出面から土師器坩出土。
10月12日（木）　21号墳墳頂削平部精査。複数列の重機キャタピラー痕と北端に１号撹乱坑を検出。
10月13日（金）　第２回懇談会開催。委員現地調査。①測量図では、21号墳は円墳と思われる。②21号墳の西・北側は周溝部分の刈払いが足りない。５m程拡張すること。③削平部分に残る汚れた土やキャタピラー痕は取り除き、古墳本来の土にすること。④調査期間との兼ね合いもあるが、削平部分を利用して十字ベルトを設け、墳丘規模を確定すること。⑤墳頂削平部は丁寧に精査し、埋葬施設の有無を確認すること。などの指導・助言があった。
10月16日（月）　21号墳西・北側の刈払い範囲の拡張を開始する。この作業は18日に終了する。
10月24日（火）　21号墳現況写真撮影後、西・北側の拡張した部分を測量図に補足する。墳丘東側削平部では、露出した墳丘東・北断面の精査を行い、積土の状況を観察する。
10月25日（木）　21号墳墳丘東側削平部の再精査。流出土・汚れた土を除去し、南北方向の２・３号溝跡、２号撹乱坑、倒木跡などを検出。ベルトを残して２号撹乱坑を掘り込む。
11月１日（水）　21号墳墳丘東・北断面の再精査。中央に３号撹乱坑を確認する。断面の写真撮影。
11月２日（木）　21号墳墳丘南側削平部の周溝検出状況写真撮影。21号墳墳頂削平部の全景写真撮影後、キャタピラー痕の除去開始。数cm下げると積土と区別できない部分もあり慎重に行う。
11月６日（月）　21号墳墳頂削平部北端の１号撹乱坑及び墳丘東側断面の３号撹乱坑にトレンチを入れる。１号撹乱坑から木根・枯枝・篠竹の葉が出土し、削平時の伐根跡と判断する。
11月８日（水）　21号墳墳丘東側断面及び北側断面の見通し図作成。併せて、２・３号溝跡平面図作成。
11月９日（木）　21号墳墳丘南側削平部で検出した周溝にトレンチを入れる。土師器細片が16点出土する。
11月13日（月）　２ｔトラック２台で、仮置きしていた篠竹・伐採木の搬出作業を開始。15日に終了する。
11月17日（金）　第３回懇談会開催。委員現地調査。①周溝に入れたトレンチは掘り足りないので、もう少し下げること。②墳丘規模確定のため北側の周溝も調査したいが、残った期間で無

理な場合は次年度に行うこと。③１号撹乱坑と重複する溝状の落ち込みは木棺の陥没坑であろう。掘方があるはずなので確認すること。④陥没坑は墳頂の北に寄っているので、２棺並列の可能性がある。⑤平面で掘方がわからないときは、１号撹乱坑を全掘して断面で確認すること。⑥11月末日で一旦調査を終了するということだが、21号墳の調査はまだまだ足りないので、次年度も継続すること。などの指導・助言があった。

11月20日（月）　21号墳墳丘南側削平部の周溝に入れたトレンチを再度掘り下げ、断面図・平面図作成。

11月21日（火）　21号墳墳頂削平部の陥没坑周辺を繰り返し精査。掘方は確認できない。

11月22日（水）　ベルトを残して１号撹乱坑完掘。壁面観察後、陥没坑とともに断面図・平面図作成。

11月24日（金）　文化庁川畑純文部科学技官・県教育庁小野忠大専門文化財主査が来跡、指導を受ける。①調査終了後の21号墳の保護方法を検討すること。②古墳の保護・保存を第一とし、埋葬施設を確認できた場合はそれ以上の発掘は行わないこと。などの指導があった。

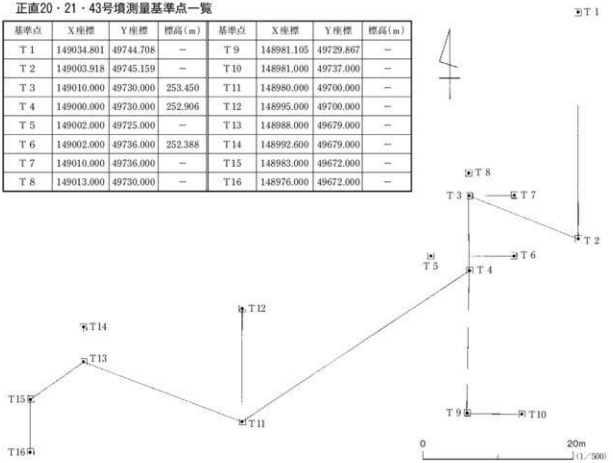
11月28日（火）　ドローンによる空中写真撮影。その後、越冬に備えて21号墳の養生作業を開始する。

11月29日（水）　トレンチや撹乱坑を埋め戻し後、削平部に防霜シートとブルーシートを二重に貼り、養生作業を終了する。現況写真撮影。

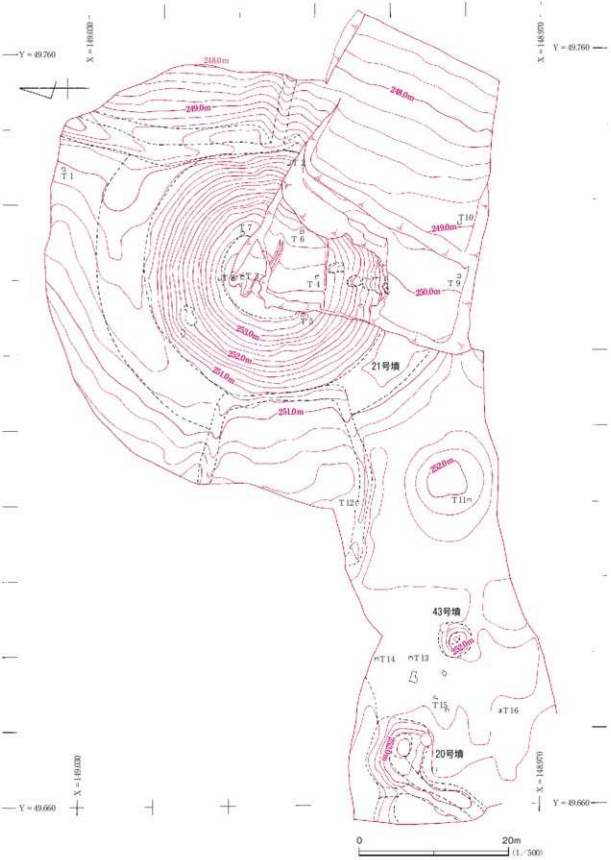
11月30日（木）　発掘調査器材の撤収。今年度の屋外調査を終了する。

正直20・21・43号墳測量基準点一覧

基準点	X座標	Y座標	標高(m)	基準点	X座標	Y座標	標高(m)
T 1	149034.801	49744.708	－	T 9	148981.105	49729.867	－
T 2	149003.918	49745.159	－	T10	148981.000	49737.000	－
T 3	149010.000	49730.000	253.450	T11	148980.000	49700.000	－
T 4	149000.000	49730.000	252.906	T12	148995.000	49700.000	－
T 5	149002.000	49725.000	－	T13	148988.000	49679.000	－
T 6	149002.000	49736.000	252.388	T14	148992.600	49679.000	－
T 7	149010.000	49736.000	－	T15	148983.000	49672.000	－
T 8	149013.000	49730.000	－	T16	148976.000	49672.000	－



第９図　正直20・21・43号墳測量基準点配置図



第10図　正直20・21・43号墳周辺測量図

第３章　調査報告

第１節　正直21号墳

１　測量調査

第２図（国営総合農地開発事業母畑地区の計画平面図を縮小複製）をみると、複数の古墳の高まりが等高線によく表れている。これによれば、21号墳とみられる高まりは、南北にやや長い長方形状に等高線が回っている。この高まりの東側は、等高線がやや狭い間隔で南北方向に流れており、東向きの斜面であることがわかる。また、北と南は等高線がそれぞれ西に入り込んでいることから、緩やかな谷状地形であることがわかり、さらに西側は、20・43号墳とみられる高まりを除けば、等高線の間隔がかなり広く、ほぼ平坦な地形であることが読み取れる。以上のことから、21号墳は幅の広い東西方向の台地の東側先端あたりに築造された古墳とみられ、少なくとも北と南に周溝がまわっていることが予想できる。実際、刈払い・伐採後の状況では、この平面図とほぼ似たような地形が現れたことから、削平部を除く21号墳周辺は三十数年前とほぼ変わらない状態と考えられる。なお、これまで21号墳は方墳と考えられてきたが、この平面図に現れている形がその要因のひとつと推測される。

墳　丘　一昨年の開発行為により、南東から南にかけて１／４程度が削平を受けているが、その度合いは場所によって異なる。最も削平が著しい南東側は、中腹から下が垂直に近い状態で最大高低差２ｍ前後削られている。ここでは墳丘が欠失し、地山面が露出していた。墳丘南側は、墳裾付近が垂直に近い状態で削られている。南側の削平部で検出された周溝の内端との間に、２～３ｍの平坦面が存在することから、本来の墳端付近が完全に削平されたことがわかる。中腹から墳裾近くまでは３か所の撹乱坑がみられるものの、西からまわり込む等高線のずれが少ないことから、現表土が削られた程度と思われる。墳頂周辺は、中腹にかけて東に緩く傾斜しながら平坦に削られている。上からみると逆台形状で、その範囲は東西方向で10～15ｍ・南北方向で８～13ｍにわたっている。削平の深さは、西側の現表土に接する部分で約10～30㎝、北側のそれは約12～50㎝である。この削平により、墳頂平坦面はほとんどが失われたとみられ、西側と北側の範囲のみが僅かに確認できた。なお、墳頂の最高標高は、西側に残る平坦面の南寄りで約253.80ｍを測った。

墳丘北～西～南西にかけては、等高線がほぼ等間隔で円弧状にまわっている。北西と西の中腹に僅かに等高線の間隔が広がるところがみられるが、これらはテラスとは考え難い。北西のそれは横穴が大きく開いており、キツネやタヌキといった獣が巣穴を掘るために掻き出した土が溜まったものである。東側は、北～西～南西に比べて等高線が全体的に西に寄り、直線的にまわっている。裾には、南北方向に延びて北側が調査区外へ抜ける旧道が存在しており、これを造成するために墳丘を削った可能性もあるが、詳しい原因についてはよくわからなかった。

周　溝　墳丘北側では、墳裾に沿うように250.0～250.7ｍの等高線が東から西に向かってＵ字状に入り込み、この部分が窪地状の地形であることがわかる。また、墳丘南西側でも同じような地形が観察され、

これらの部分が周溝の範囲と考えられる。墳丘西側には、墳裾を南北方向に約15m延びてコの字状に西に折れる溝状の落ち込みがみられる。この落ち込みに南北を挟まれた部分は、墳裾に向かって緩く傾斜しているが、窪地状の地形は確認できない。北と南には周溝と考えられる窪地状の地形が確認できることから、この辺りのみ周溝が途切れる可能性がある。また、東側については、墳裾を南北に延びる旧道により北側の窪地状の地形が途切れ、旧道東側の斜面の等高線にも顕著な変化が認められないことから、周溝の有無は推測できなかった。ただ、南側の削平部断面に比較的幅の広い落ち込みが確認できることや墳丘南側削平部で検出された周溝の東端が北東を向いていることを考慮すると、東側にも周溝がまわる可能性が高い。確認できた周溝幅は、現表土面で５～７ｍである。

この古墳は、これまで方墳と考えられてきたが、上記のような墳丘・周溝の状況から段築のない円墳であることがほぼ確実となった。墳丘規模は、現表土面の北東－南西墳端で34m前後を測り、これに周溝幅を加えると最大で48m前後に達する。墳高は、西側からみると2.7m前後、北側からは3.2m前後、東側からは3.4m前後である。

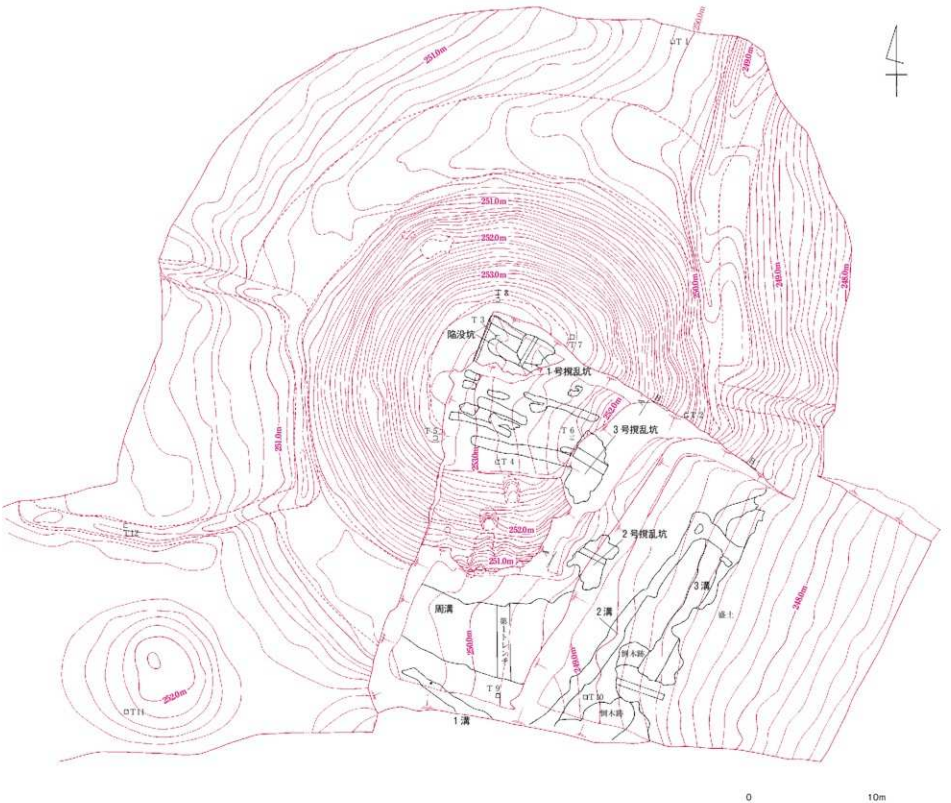
２　削平部の調査

墳頂削平部　墳頂周辺から南と東の中腹にかけて、東西10～15m・南北８～13mの範囲にわたって削平された部分である。北西側の東西約6.8m・南北約4.0mの範囲は削平の深さが10cm前後で、現表土が削られた程度である。また、その南側は30cm前後の段差があり、深く削られていた。複数回精査を行った結果、ここでは削平の際に使用された重機のキャタピラー痕・１号撹乱坑・陥没坑を検出し、積土から土師器細片が12点出土した。重機のキャタピラー痕は、暗褐色土と黄褐色土混じりの汚れた土が堆積し、東西方向に複数列並ぶ溝状の落ち込みとして確認した。ベルトを残して掘り下げた結果、３～５cm前後の深さで墳丘積土に達したが、中には墳丘積土と区別がつかなくなったものもあり、これらはその時点で掘り下げを中止した。１号撹乱坑は、北西側の現表土が削られた範囲の東端で検出した。北側で重機のキャタピラー痕、南側で陥没坑と重複し、重機のキャタピラー痕に切られ、陥没坑を切っている。南北方向のベルトを残して掘り込みを行った結果、黄褐色土や黒褐色土混じりの埋土の中から木根・枯枝・篠竹の葉などが出土したため伐根坑と判断した。撹乱坑の大きさは、上端で東西約248cm・南北約263cmで、検出面からの深さは約115cmである。

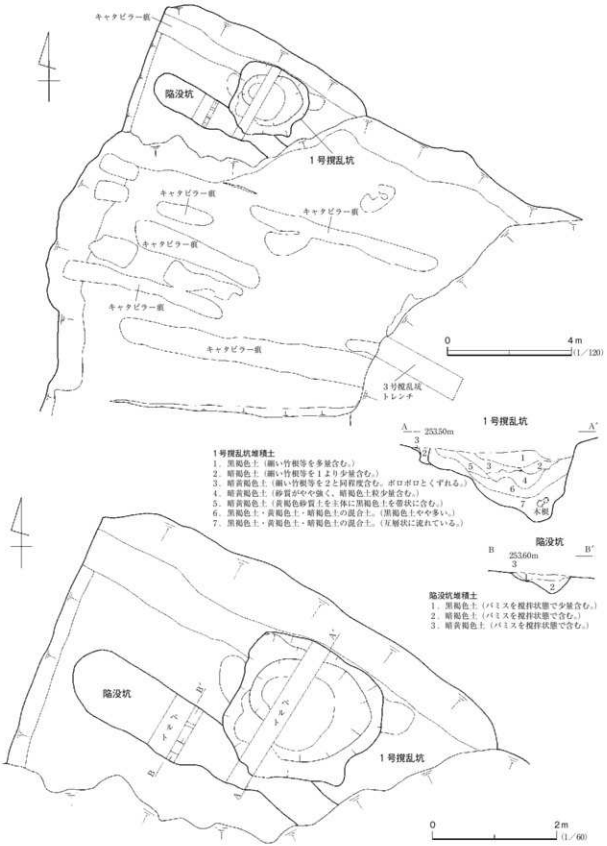
陥没坑は、１号撹乱坑の南側、表土が削られた範囲で検出した。当初は、重機のキャタピラー痕と誤認したため、ベルトを残して部分的に掘り込みを行っている。第３回懇談会の委員現地調査の際に、陥没坑との指摘により初めてその認識を持った。東寄りの北側で１号撹乱坑と重複し、これに壊されている。また、東端は削平により不明である。掘り込みを行った範囲の堆積土は、黒褐色土・暗褐色土・暗黄褐色土の３層に区分した。確認できた長さは東西約450cm、幅は西側約103cm・中央部約97cm・東側約65cmで、長軸方向はN57°Wである。遺物は、堆積土から土師器細片が１点出土している。陥没坑の掘方を確認するため、周辺の精査と重複する１号撹乱坑の壁面精査を繰り返し行ったが、それらしい土色の変化は確認できなかった。なお、この陥没坑は、墳頂の北に寄っていることから、南側に別の主体部が見つかる可能性が高いとの指摘を委員から受けている。

墳丘南側削平部　墳丘の南側で、東西11～13m・南北11～14mの範囲にわたって削平された部分である。削平の深さは、北西法面で0.9m前後、南西法面で1.5m前後、南東法面で0.6m前後を測る。ここでは、

第11図　正直21号墳測量図



第12図　削平部精査後の正直21号墳



第13図　正直21号墳墳頂削平部と陥没坑・1号撹乱坑

流出土や汚れた土を除去し、黄褐色の地山面で周溝と１号溝跡を検出した。また、周溝については、詳細を確認するため第１トレンチを設定して掘り込みを行った。

周溝は、外端が直線的で、内端はやや曲折しながら弧状にまわっている。西端から４ｍ前後まではほぼ等幅で、東側は徐々に広がっている。西端約4.5ｍ・中央約5.2ｍ・東端約6.5ｍの幅で、東寄りの第１トレンチを掘り下げると、40㎝前後の深さで底面に達した。検出面からの深さは内端側約45㎝・中央付近約39㎝・外端側約35㎝で、底面レベルは内端側が最も低い。周溝の堆積土は５層に区分でき、ℓ１～３は色調と含有物の異なる黒褐色土、ℓ４は底面を広く覆う褐色土、ℓ５は南北の壁際にのみ堆積する明褐色土である。これらはレンズ状の堆積状況であることから、自然堆積と思われる。底面は、外端側が若干窪むがほぼ平坦である。壁の立ち上がりの角度は外端側約45°・内端側約25°を測り、内端側が緩やかである。堆積土中から土師器片が16点出土したが、いずれも細片で実測できるものはなかった。

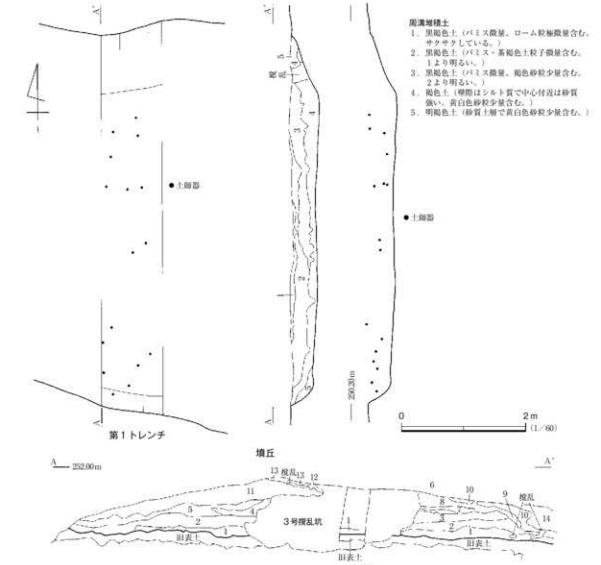
１号溝跡は周溝の南側で検出した。東西方向に延びる溝跡で、東側は南側法面を斜行して調査区外へ抜け、西側は削平のため調査区内で途切れている。検出できた長さは、法面部分を含めて約7.1ｍ、幅は52～113㎝である。検出面から、第15図に示した土師器坩が出土している。上げ底気味の小さな底部からソロバン玉のような胴部に至り、口縁部が外傾する器形である。外面はナデ・ユビナデ・ハケ目・ケズリ、内面はナデが施されている。時期は、前期末から中期初頭と思われる。

なお、この削平部では、流出土や汚れた土を除去する過程で土師器片が142点出土した。これらはいずれも細片で、実測できるものはなかった。

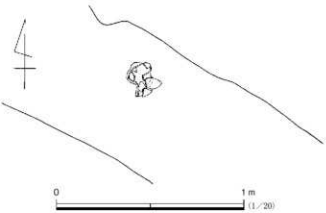
墳丘東側削平部　東向き斜面を含む墳丘の南東側で、最も削平が著しい部分である。墳丘中腹から下はすでに失われており、これに続く東向き斜面も切土と盛土によりほぼ平坦な地形に改変されている。削平の深さは、墳丘中腹下で２ｍ前後、東向き斜面の基部で1.2ｍ前後である。ここでは、流出土や汚れた土を除去し、２・３号溝跡や２号撹乱坑を検出した。また、削平により露出した墳丘断面で、３号撹乱坑を確認した。２・３号溝跡は、砂質の地山面で検出した。両溝跡は重複し、２号溝跡が３号溝跡を切っている。２号溝跡は北東－南西に延びて、南側は調査区外へ抜けている。北側はほぼ直角に南東へ折れて盛土の下に入っている。検出できた長さは、調査区南端から南東へ折れる部分までで約21.5ｍ、幅は50～160㎝である。３号溝跡も、北東－南西に延びる溝跡である。南側は盛土の下で途切れ、北側は東に屈曲しながら盛土の下へ入っている。検出できた長さは約16.3ｍ、幅は95～163㎝である。両溝跡は、位置的に21号墳の周溝と重複する可能性があるが、周溝が削平されているため関係は不明である。２号撹乱坑は、削平により露出した墳丘断面に近接して検出された。堆積状況が１号撹乱坑と類似しており、伐根跡と考えている。堆積土から、土師器片の他、陶器片やビニールが出土している。

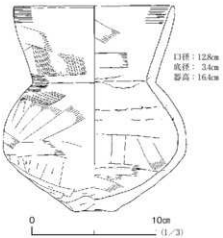
削平により露出した墳丘断面で、積土の観察を行った。東断面（第14図）では、３号撹乱坑により二分されていたが、黒褐色の旧表土がほぼ水平に堆積しており、積土はこの上に行われている。現況では、１ｍ前後の高さまでは黄褐色系の土と黒褐色系の土を交互に重ね、その上に黄褐色土を主体とする土を積んだ様子がうかがえた。なお、３号撹乱坑はトレンチ調査で終了したため全容が不明であるが、積土との境に地割れが生じていることから、今回の開発行為により掘削されたものと考えている。

この削平部でも、流出土や汚れた土を除去する過程で土師器片が189点出土したが、いずれも細片で実測できるものはなかった。



第14図　正直21号墳墳丘南側削平部第１トレンチと墳丘東側削平部墳丘断面見通し図





第15図　正直21号墳墳丘南側削平部１号溝跡土師器坩

第２節　正直20・43号墳

正直20号墳と43号墳は、正直21号墳の西側に所在する。両古墳は、手入れのされた山林内で約10mの至近距離に位置する。周囲には屋敷神や近世の墓碑が複数建てられており、現在もその季節になると献花が行われている。両古墳は、現状変更の可能性が低いとの判断から測量調査のみを行った。

１　正直20号墳

正直20号墳は、正直21号墳から西に40m前後離れた台地平坦面に位置する。

墳　丘　東西約10.9m・南北約7.9mの範囲が矩形の高まりとなっており、墳形は方墳の可能性が高い。南西端に、北東－南西方向に延びる幅約250～400cm・高さ20cm前後の土手状の高まりが取り付いているが、古墳に伴う遺構とは考え難い。墳頂は、西側の土手状の高まりに続く部分がスロープ状に低くなるが、東側に東西約3.3m×南北約2.2mの平坦面が認められる。墳頂の最高標高は、平坦面の中央付近で約252.5mである。墳高が最大で1.1m前後であることから、上面を削られている可能性がある。

周　溝　墳丘の北側から北西にかけて窪地状の地形がみられるが、この地形は東西方向に流れてしまい、南側にはまわり込まない。また、南東側にも窪地状の地形が僅かに観察されるが、東側と南側は平坦な地形となっており、まわり込む様子はうかがえない。したがって、現状では周溝の有無は不明である。

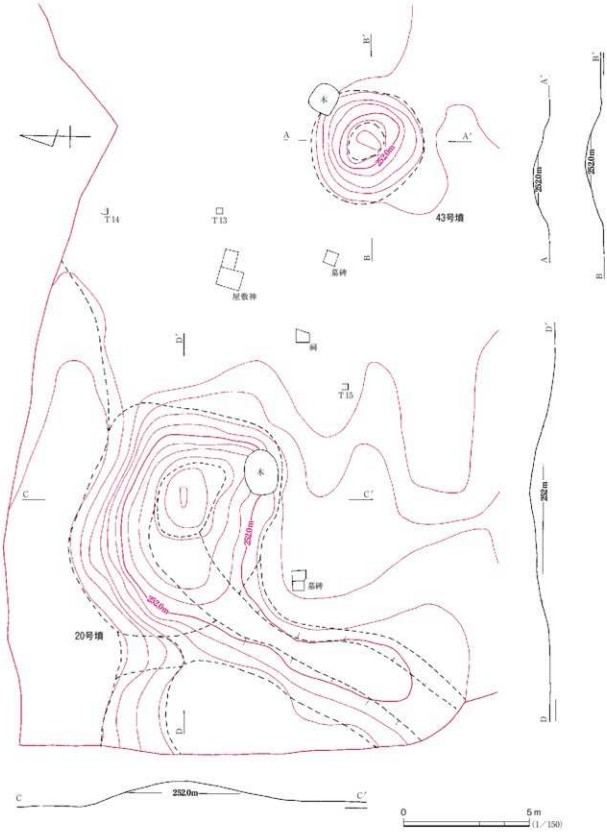
２　正直43号墳

正直43号墳は、正直21号墳と正直20号墳の間、21号墳からは西に約30m離れた台地平坦面に位置する。

墳　丘　現状では、北東側の裾に大木があるが、それ以外は特に削平を受けたような痕跡は認められない。等高線が円弧状にまわることから、墳形は円墳とみられる。墳頂には、平坦面と呼べるような広がりは観察できないが、252.1mの等高線から上が比較的緩やかな傾斜となっている。墳頂の最高標高は、中央付近で約252.2mである。墳丘規模は長径約4.6m・短径約4.5mで、墳高は0.6m前後である。

周　溝　東側に、墳丘に向かう緩い傾斜が僅かにみられるが、墳裾と想定されるラインの外側はほぼ平坦で、窪地状の地形は観察できない。したがって、周溝の有無は不明である。

この古墳は、付近の墳丘が確認できる古墳の中では極めて小さい。また、墳頂部の平坦面がはっきりせず、周溝も不明であることなどを考慮すると、古墳と呼ぶには疑問符が付くと思われる。



第16図　正直20・43号墳測量図

第４章　まとめ

今回、正直20・43号墳については、測量調査のみを行った。また、正直21号墳は測量調査に加え、主に一昨年の開発行為による削平部の調査を行った。同墳については、トレンチ調査により墳端を確認し、詳細な大きさを確定することや墳頂削平部で埋葬施設の状態を確認することなども期待されていたが、これらについては調査期間との関係から次年度へ譲ることとなった。以下では、前節で述べたことと重複するが、今回の調査で知り得た各古墳の内容について改めて記す。

正直21号墳　古墳群の中で、古墳が集中する南側ブロックから東に外れた台地先端に築造された古墳である。一昨年の開発行為により、南東から南にかけて１／４程度削平を受けている。墳丘南側の中腹から墳裾辺りまでは、現表土が削られて積土が露出した程度であるが、墳丘南東側の中腹から下と南側の墳裾は完全に失われている。また、墳頂周辺は、東側の中腹から南側の中腹辺りまでの範囲が10～50㎝程度削平されており、これにより墳頂平坦面は北側と西側が僅かに確認できる程度である。墳丘北東側から北・西側を経て南西側辺りまでの斜面は、等高線がほぼ等間隔で円弧状にまわることから、墳形は円墳であることがほぼ確実である。現況の墳丘規模は、北東－南西方向で34m前後である。周溝は、墳丘南側削平部において約4.5～6.5mの幅で検出され、墳丘の北側にも窪地状の地形が観察されることからまわることは確実であるが、西側墳裾のコの字状に折れる溝状の落ち込みに挟まれた南北約15mの範囲は、窪地状の地形が読み取れないことから、この辺りのみ途切れる可能性がある。埋葬施設の詳細については確認できていないが、墳頂削平部の北寄りで陥没坑と思われる東西方向の落ち込みを検出している。長さが450㎝以上であることから木棺直葬の可能性が高い。なお、この落ち込みは墳頂の北寄りに位置していることから、２基並列の可能性が指摘されている。古墳の築造時期については、今のところ確実に伴う資料が得られていないので確定することは困難である。

正直20号墳　古墳群の南側、古墳が集中する東へ延びる台地の平坦面に築造された古墳である。正直21号墳からは、西に40m前後離れている。現況では、墳丘南西端に北東－南西方向に延びる土手状の高まりが取り付いているが、ここを除くと墳丘北側から東側を経て南側に至る等高線が直線的にまわり込むことから、墳形は方墳とみられる。墳丘規模は、東西約10.9m・南北約7.9mで、東西方向にやや長い形状である。墳頂は東に寄り、東西約3.3m×南北約2.1mの範囲で平坦面が確認できるが、墳高が最大で1.1m前後であることから、上面を削られた可能性がある。現地形からは、周溝の有無は確認できない。

正直43号墳　正直21号墳からは、西に約30m離れた台地平坦面に築造されている。現況では特に削平を受けた形跡はなく、墳形は円墳とみられる。墳丘規模は長径約4.6m・短径約4.5mで、墳高は0.6m前後である。周溝は不明で、古墳群の中では極めて小さいことから、古墳とするには疑問が残る。

正直古墳群の保護・保存に関わる調査は、来年度以降も継続される予定である。今回、正直21号墳の調査では詳細な大きさの確定や埋葬施設・築造時期の特定など多くの課題が残ったが、これらについては来年度の調査で解決できるものと思われる。

写 真 図 版

正直古墳群の位置（国土地理院の空中写真 1947 米軍空撮）

図版2

（1）正直古墳群遠景（南より）

（2）調査地区遠景（西より）

（1）正直20号墳（南東より）

（2）正直43号墳（北より）

図 版 4

（1）正直21号墳刈払い・伐採前（東より）

（2）正直21号墳刈払い・伐採後（南東より）

（1）正直21号墳刈払い・伐採後（西より）

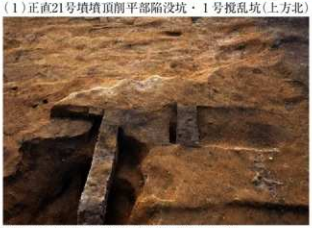
（2）正直21号墳刈払い・伐採後（北東より）

図 版6

（1）正直21号墳調査終了後全景（上方北）

（2）正直21号墳調査終了後遠景（南東より）

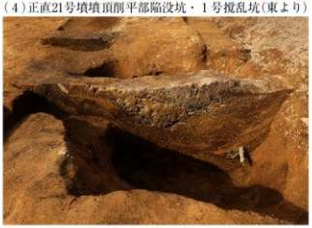
（1）正直21号墳墳頂削平部陥没坑・1号撹乱坑（上方北）



（2）正直21号墳墳頂削平部陥没坑（北より）

（4）正直21号墳墳頂削平部陥没坑・1号撹乱坑（東より）

（3）正直21号墳墳頂削平部陥没坑断面（東より）



（5）正直21号墳墳頂削平部1号撹乱坑断面（東より）

図 版8

（1）正直21号墳墳丘南側削平部周溝検出状況（北より）

（2）正直21号墳墳丘南側削平部周溝断面（東より）

（1）正直21号墳墳丘南側削平部周溝断面（北東より）

（2）正直21号墳墳丘南側削平部 1 号溝跡土師器坩

（3）正直21号墳墳丘南側削平部 1 号溝跡土師器坩

（4）正直21号墳墳丘南側削平部 1 号溝跡出土土師器坩

図 版10

（１）正直21号墳墳丘東側削平部２・３号溝跡検出状況（上方東）

（２）正直21号墳墳丘東側削平部墳丘断面（東より）

報 告 書 抄 録

ふりがな	しょうじきこふんぐんーだいいちじはっくつちょうさほうこくー
書名	正直古墳群－第１次発掘調査報告－
副書名	
シリーズ名	
巻次	
シリーズ番号	
編著者	佐藤常雄　高田　勝
編集機関	公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター
所在地	福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23番地
発行機関	福島県郡山市教育委員会
所在地	福島県郡山市朝日一丁目23番7号
発行年月日	西暦　2018年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
正直古墳群 (しょうじき こ ふん ぐん)	福島県郡山市(ふくしまけんこおりやまし) 田村町正直字(たむらまちしょうじきあざ) 除古(けこ)・竹ノ内(たけのうち) ほか			37度 20分 29秒	140度 23分 38秒	20170901 ～ 20171130	2,800相当	保存事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
正直古墳群	古墳	古墳時代	正直20号墳 正直21号墳 正直43号墳	土師器	測量調査により、20号墳が約10.9×7.9ｍの方墳、21号墳が直径34ｍ前後の円墳、43号墳が直径4.5ｍ前後の円墳？であることが分かった。また、21号墳は墳頂の削平部から陥没坑らしい落ち込みを確認した。

正直古墳群調査保存事業

正　直　古　墳　群

―第１次発掘調査報告―

発行日　平成30年3月30日

編　集　公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
文化財調査研究センター
〒963-0541 福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23番地

発　行　福島県郡山市教育委員会
〒963-8601 福島県郡山市朝日一丁目23番7号

印　刷　株式会社日進堂印刷所
〒960-2194 福島県福島市庄野字柿場１－１

2018